

# 『タズキラ・イ・ホージャガン』 日本語訳注 (4)

澤 田 稔

富山大学人文学部紀要第 64 号抜刷

2016 年 2 月

## 『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注 (4)

澤 田 稔

### はじめに

本訳注は『富山大学人文学部紀要』第 63 号 (2015 年 8 月) 掲載の「『タズキラ・イ・ホージャガーン』日本語訳注 (3)」の続編であり、日本語訳する範囲は底本 (D126 写本) の p. 78 / fol. 39b の 11 行目から p. 108 / fol. 54b の 6 行目までである。本号の内容の要旨は以下のとおりである。

前号の日本語訳注 (3) で叙述されているように、カシュガル・ホージャ家イスハーク派のユースフ・ホージャムはカルマク (ジューンガル) の本拠地イラ (イリ) からカシュガルに逃れ帰ったが、本号では、まず、カシュガルのユースフ・ホージャムに対するカシュガル、ウチュ、アクス等に拠るベグ (豪族) たちの行動、とりわけ、カルマクに内通するベグたちの陰謀について語られる。この陰謀の背景にあるカルマクは、王位をめぐるダワチとアムルサナーの抗争により弱体化していたが、ユースフ・ホージャムの離反の動きを封じるために使者をカシュガルに送る。しかし、その使者をはじめカルマクたちは武装したユースフ・ホージャムの勢力に圧倒され、カシュガルをあきらめてヤルカンドに向かった。

ヤルカンドのハーキム (都市長官または行政長官) であるホタン出身のガーズイー・ベグは、カルマクの使者たちと策略をめぐらし、ユースフ・ホージャムの長兄ホージャ・ジャハーンを捕縛する。ホージャ・ジャハーンの息子スイッディーク・ホージャムは父の異変を知り、ヤルカンドからホタンに向かうとともに、カシュガルにいる叔父のユースフ・ホージャムに事態を知らせる。スイッディーク・ホージャムはホタンにおいてガーズイー・ベグの息子でホタンのハーキムであるウマル・ベグとその一族を捕まえ、ホタンの軍勢を率いてクルグズ (キルギズ) の兵とともにヤルカンドに向かった。

カシュガルのユースフ・ホージャムはガーズイー・ベグにその愚行を非難する手紙を送り、ホージャ・ジャハーンに危害を加えないよう警告する。またカシュガルのハーキムでホタン出身のフシュ・キフェク・ベグも手紙を送り、悪行をやめてホージャ・ジャハーンを統治の王座に坐らせることを求める。ホタンの親族を捕虜にされたガーズイー・ベグは、結局、ホージャ・ジャハーンに罪の許しを乞うことにした。

カシュガルではユースフ・ホージャムが人々を鼓舞してカルマクから独立する動きを進めていた。そのムスリム軍は交易に来ていたカルマクを襲撃して追い払った。

## 日本語訳注

物語の章。カシュガルについて聞かねばならない。

さて、ユースフ・ホージャムがカシュガルに行き、国 (yurt<sup>1)</sup>) を片付けていた時、フダー・ヤール・ベグ (Hūdā Yār Beg) がカシュガルのイシク・アガ<sup>2)</sup> であった。〔フダー・ヤール・ベグは〕イスラームについて無知で弱い人であった。カーフィル(不信仰者)たちに心を寄せる人であった。ユースフ・ホージャムの行状を見て、心に震えがきていた。イスラームが広がることに決して<sup>3)</sup> 同意しなかった。カーフィルたちに仕えてムスリムたちにとても圧迫を加え、イシク・アガ職に達していた。ユースフ・ホージャムとすべての尊師 (‘azīz) たちに関して「私が裁いている (yargu qīla dur men)」と言い、イラにおいて非常に傲慢なことをしていた。それ故にユースフ [p. 79 / fol. 40a]・ホージャムに決して温かくなかった。外見を整え、内面を損なっていた。

突然<sup>4)</sup> [のことであるが]、アブドゥ・サッタール (‘Abdū Sattār<sup>5)</sup>) というアルトゥチュ<sup>6)</sup> 人の禿 (Artūčluq taz) がいて、アクスからアブド・ワッハーブ・ベグと相談して、カルマクに仕えるためアルトゥチュに来て、自分の屋敷 (ハウリ) に下馬した。アブドゥ・サッタール・ベグを見るために来た者を皆、その屋敷に閉じ込めた。入る者はいるが、出る者はいなかった。その門を固めた。ニヤーズ・ベグ (Niyāz Beg) というアルトゥチュのハーキムがいた。〔ニヤーズ・ベグは〕恐れをいだいて城市に来て、ある人を通じてフダー・ヤール・ベグに手紙を送った。フダー・ヤール・ベグはこの手紙の内容を聞き、数名の自分に近く親しいベグたちを家に密かに呼んで来て、この手紙を見せた。内容は次の通りである。「アクスのハーキム、アブド・ワッハーブ・ベグから、ウチュのハーキム、ホージャ・スィー・ベグから、フダー・ヤールをはじめカシュガルのベグたちへの言葉は次の通りである。シナ皇帝 (Hāqān-i Čīn) [のもとから]<sup>7)</sup> アムルサナー

1) D126 は YVRVT と綴るが、Or. 5338, fol. 42b; Or. 9660, fol. 42b の YVRT が正しい。

2) イシク・アガは、清朝統治期の用法からすると、ハーキム (都市長官または行政長官) の副官であると見られる。

3) hargiz. D126; Or. 5338, fol. 42b; Or. 9660, fol. 43a; Or. 9662, fol. 53b は HRKYZ と綴る。

4) ba-nāgāh. D126 は BNAKA と綴るが、Or. 5338, fol. 42b; Or. 9660, fol. 43a の BNAKAH が正しい。

5) Or. 5338, fol. 42b; Or. 9662, fol. 54a では ‘Abd Sattār. A グループの写本 ms. 3358, fol. 93a-b では、アブド・アッサッタール (‘Abd al-Sattār) と表記されている。

6) Artūč (<ARTVJ)。カシュガル北方のアルトゥシュ (Artush) を指している。アルトゥシュには、カシュガル市の東北 30km に位置する「下アルトゥシュ」と、同市西北約 20km にある「上アルトゥシュ」というふたつのアルトゥシュがある (ジャリロフ・アマンベク、河原弥生、澤田稔、新免康、堀直『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』NIHU プログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点、2008 年、178 頁、注 422)。なお、Or. 9662 写本はこの箇所 (fol. 54a) 以降において Artūš (<ARTVŠ) と表記している。

7) Or. 9662, fol. 54a の Hāqān-i Čīndin による。

とともに大軍が来るらしい。今、イラの中は非常に切迫して混乱の状態であり、ダバチはそれに対抗できない。シナ皇帝に、アムルサナーに、仕えるために何かするとすれば、ホージャ・ユースフを捉えて殺させろ。もしカルマクたちの時代のようになれば、この奉仕を〔彼らは〕決して忘れない。そのようにならなければ、国（ユルト）を空にして、そなたたちの好きなように治めているように」という手紙を封印していた。このベグたちはこの方策を良いとみなさなかった。むしろ、**[p. 80 / fol. 40b]**「ユースフ・ホージャム猊下はとても勇敢で賢い知的な人である。決してこの罫にかけることはできない。〔ユースフ・ホージャムが〕もし知らせを得るならば、我々みな首がとぶ」と言って制止し、ぐずぐずと事を行うことに決めた。しかし、フダー・ヤール・ベグの悪魔が誘惑して、その理性の眼を閉じさせた。彼の思考はホージャムを殺す以外の事に至らなかった。なぜならば、死期が彼の襟をつかんでいたからである。

さて、彼らの中にシャー・ベグ (Šāh Beg) という人がいた。アルトゥチュ村 (mawḍi') 出身であった。母方はサイイドの子孫 (sayyid-zāda) であった。父方はベグの子孫 (beg-zāda) であった。その弟ムバーラク・シャー・ベグ (Mubārak-šāh Beg) とともに両名をフダー・ヤールは呼び出し、次のように言った。「ホージャ・ユースフを殺さないかぎり、事は収まらない。明日は金曜日で、ユースフ・ホージャムは金曜礼拝に来る。数名の鉄砲打ち (miltīq andāz kišilār) を金曜マスジドの丸天井の頂に据えよう。マスジドに入り礼拝をしている時に合図して〔鉄砲を〕打つ。シャー・ベグ、そなたは百人とともにマスジドの門を閉めるように。アブドゥ・サッタール・ベグは四百人とともに来て、城市の門の前にいるように。鉄砲の音が出たら、マスジドの門から人を出させるな。我々はオルダ（宮廷）に突入しよう。金曜日、人々 (el) は皆、商売をしていて分らない。フシュ・キフエク・ベグ<sup>8)</sup> は単純な人である。恐れをいだいて退避する。我々はオルダに属する人々をその家々で捉えて略奪しよう。それから、我々はすべての官職 (manšab) を、手が **[p. 81 / fol. 41a]** 事に達した者たち<sup>9)</sup> に与えよう。我々は反抗的な者たちを殺そう。また、各城市にカラ・ハーン (qara ḥān)<sup>10)</sup> という十五人のカルマクがいた。彼らも

8) D126 は Biy (<BY) と記すが、Or. 5338, fol. 43b; Or. 9660, fol. 44a より Beg とする。フシュ・キフエク・ベグはカシュガルのハーキムである（本書 **[p. 66 / fol. 33b]** 「日本語訳注 (3)」45-46 頁、**[p. 69 / fol. 35a]** 「日本語訳注 (3)」49 頁参照）。

9) qolī iṣḡa teggānlār. 「仕事を成し遂げた者たち」という意味であろう。

10) ジューンガル（カルマク）が支配下のオアシス都市に置いたカラ・ハーンは徴税をおこなったが（佐口透『18 - 19 世紀 東トルキスタン社会史研究』42 頁参照）、兵力を有していたであろう。サラヘトディノヴァ氏は Ch. Ch. Valikhanov により「カラハン、すなわち警察的監視人 (politseiskii nadziratel')」と記している (M. A. Salakhmetdinova, “Sochinenie Mukhammed-Sadyka Kashgari „Tazkira-i-khodzhagan“ kak istochnik po istorii kirgizov,” *Izvestiya Akademii Nauk Kirgizskoi SSR*, tom 1, vypusk 1, Frunze, 1956, p. 97)。Ch. Ch. Valikhanov, *Sobranie sochinenii v pyati tomakh*, Tom 2, Alma-Ata: Izdatel'stvo Akademii nauk Kazakhskoi SSR, 1962, p. 305 参照。

援助する」と約束して<sup>11)</sup>、この内容で手紙を書き、フダー・ヤール・ベグが捺印してムバーラク・シャー・ベグ (Mubārak Šāh Beg) に渡した。「そなたはこの手紙をアルトゥチュに届けてアブドゥ・サッタール・ベグに渡せ。そなた自身もアブドゥ・サッタール・ベグと助け合え。シャー・ベグは我々と助け合え。そなたは秘密の道 (pinhān yol) で行くように」と言って別れを告げた。

しかし、シャー・ベグはムバーラク・シャー・ベグと一緒に次のように相談した。すなわち、「我々へのフダー・ヤール・ベグの約束の通りアルトゥチュ<sup>12)</sup>に対するハーキムとなるよりも、我々がこの手紙をホージャムに渡すならば、ホージャムはそれよりも高い官職を与える。突然この事が上手くいかなければ、我々の首がとぶ」と言って、ゆっくりとス門 (Sū Darvāzasi)<sup>13)</sup> を出て、いくらか道を進んで〔道を〕<sup>14)</sup> たがえて〔戻ってきて〕<sup>15)</sup>、横門 (yan işik) からオルダに入った。

さて、ムバーラク・シャー・ベグはアーホン・ムッラー・サキー (Āḥvun Mullā Saqī) の娘 (‘ajiza)<sup>16)</sup> を娶っていた。ムッラー・サキーの息子アブド・アルマジード (‘Abd al-Majīd)<sup>17)</sup> もこの協議に加わった。ムバーラク・シャーはムッラー・サキーの息子とともに三人で就寝前の〔礼拝の〕<sup>18)</sup> 時間にアルトゥンルク・サライー (Altunluq Sarāy, 「黄金の宮殿」) の前に来た。ヤサーウル (yasāvul)<sup>19)</sup> に許可を求めた。ヤサーウルは入って許可を得て、彼らを連れて入った。宮殿 (sarāy) の人払いをして、この秘密を暴露して手紙を渡した。〔ユースフ・〕ホージャムは手紙を見た。彼らに恩寵を示して、次のように言った。【p. 82 / fol. 41b】「〔至高なる神が望むならば〕<sup>20)</sup> そなたは我々に捕われる身となる。我々はそなたに捕われる身とならない」。

11) BVLJAQ qīlīp. 「約束して」と訳すことについては、本書 【p. 71 / fol. 36a】「日本語訳注 (3)」50 頁の注 100 参照。

12) Or. 9660, fol. 44b では Artūš.

13) 「水の門」という意味であろう。固有名詞であるかどうか確認できていない。ハルトマン氏は「私が知る限りにおいて、今日カシュガルにおいてその名称〔Sū 門〕はひとつもない」と注記している (Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien.” *Der Islamische Orient. Berichte und Forschungen*, Pts. 6-10, Berlin: Wolf Peiser Verlag, 1905, p. 238, footnote 1)。

14) Or. 9660, fol. 44b により yolnī を補う。

15) Or. 9662, fol. 55b の yanīp kelip および Or. 9660, fol. 44b の yanīp による。

16) A グループの写本の Turk d. 20, fol. 71a; D191, fol. 81a によると、この娘の名前は Ḥalīma Bānū である。ms. 3358, fol. 95b は Ḥalīma と記す。

17) D126 は ‘Abd al-Masjid と誤記する。Or. 5338, fol. 44a および A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 71a; D191, fol. 81a; ms. 3358, fol. 95b) による。

18) Or. 9660, fol. 44b により namāz を補う。

19) 近衛兵のことである。ヤサーウルについては 【p. 41 / fol. 21a】「日本語訳注 (2)」105 頁の注 106 参照。

20) Or. 9660, fol. 44b; Or. 9662, fol. 55b により in šā’a ’llāhu ta’ālā を補う。

詩

私がたとえ想像しても、天がたとえ想像しても

私は未熟な想像、天は成熟した想像

〔ユースフ・ホージャムは〕家僕 (hādim) たちに「ムバーラク・シャーを秘かに隠しておけ」と命じ、他の者どもに退去の許可を与えた。それから、オルダの貴人 (çoq) たちを集め、「バーバーク (Bābāq) <sup>21)</sup>・ホージャ・アブド・アッラーを呼ぶように。ホージャ・ムーミン <sup>22)</sup>を、ダルヴィーシュ・ブカーウル <sup>23)</sup> (Darvīš Bukāvul) をも呼ぶように」と命じた。

しかし、そのうちの誰も現れていなかった。ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム猊下は深い眠りについていた。宮殿 (sarāy) の門は固く閉められ、誰も宮殿の門を開けたり、眠りから覚ますことはできなかった。何故ならば、〔ホージャ・アブド・アッラーは〕威厳のある人であったからである。ユースフ・ホージャムは立腹した。ひとりの厚かましい家僕に「素早く目覚めさせて連れて来るように」と命じた <sup>24)</sup>。この家僕は厚かましくも行って、宮殿の門を〔叩き〕<sup>25)</sup>、強硬に叫んで目覚めさせた。急がせず、不安をいだきながら服を着せて連れてきた。何故ならば、〔ホージャ・アブド・アッラーには〕何事も恐れないという習性があり、心配することはその天性にはなかったからである。ルスタム <sup>26)</sup>の習わしが〔彼には〕あった。

アブド・アッラー・ホージャム猊下が入ってきて、お辞儀した。ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下は立腹した状態であった。祝福された口調でまさに次のような言葉が出てきた。「そなたの安楽、睡眠は私の存在とともにある。そなたは **[p. 83 / fol. 42a]** 心のなかで、この眠り、富裕がいつもあると思うな。私は、私の四十日 (meniñ qırqim) <sup>27)</sup>が過ぎる前にまさにこの王座においてそなたが確乎となっているのを見たい」。しかし、応諾の時であった。決して…去らなかった <sup>28)</sup>。ユースフ・ホージャム猊下が逝去して四十日の一日前 <sup>29)</sup>に〔ホージャ・アブド・アッラーは〕カシュガルの統治の王座 (taht-i saltanat) の運を投げ捨てヤルカンドに来た。こ

21) Or. 5338, fol. 44b では Būbāq, Or. 9660, fol. 44a では Bubāq と表記されている。

22) ホージャ・アブド・アッラーとホージャ・ムーミンはともにユースフ・ホージャムの息子である (本書 [p. 69 / fol. 35a]「日本語訳注 (3)」48 頁参照)。

23) ブカーウルは「毒見役」で、軍の監督官も務めたという (間野英二『バーブル・ナーマの研究 III 訳注』京都：松香堂、1998 年、68 頁、脚注 419)。

24) D126 は YTVRDYLAR と誤記するが、Or. 9660, fol. 45a の buyurdılar (<BYVRDYLAR) による。

25) Or. 9660, fol. 45a により qaqip を補う。

26) 『シャー・ナーマ』に登場するイランの伝説的英雄。

27) イスラームの葬儀では、埋葬後 40 日目に墓参がおこなわれる (鷹木恵子「葬儀」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店、2002 年、581 頁)。

28) Hargiz BAYL ketmādi. BAYL の読みと意味を解し得ない。なお、Or. 9662, fol. 56a は BAYYL と綴る。

29) kam. D126 は KAM と綴るが、Or. 9660, fol. 45a; Or. 9662, fol. 56b の KM に従う。

の話はその箇所ですべられる。

要するに、ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下はいくらか怒りのこもった言葉を発し、出来事を説明せず、「ホージャ・ムーミン<sup>30)</sup>、ダルヴィーシュ・ブカーウルがどこにいても、人を送って見つけよ」と命じた。さて、この兩人は数名の者ととともに狩りに出て、カラキル<sup>31)</sup>という村 (mawqī‘) で泊っていた。夜を徹して人が行って連れてきた。全てのオルダの人が一人ひとり集まった。〔ユースフ・ホージャムは〕この秘密をホージャ・ムーミン、ホージャ・アブド・アッラー、ダルヴィーシュ・ブカーウルに明かした<sup>32)</sup>。その夜、オルダを固めた。翌朝、それよりも強固に保った。会合 (sorun)<sup>33)</sup> に来ていたベグたち、国の人びと<sup>34)</sup> も〔それを〕見て驚いていた。

さて、フダー・ヤール・ベグは、オルダの人びとがこのように苦勞していることから、〔ユースフ・ホージャムたちは〕情報を得ているのだらうと疑った。この者〔フダー・ヤール・ベグ〕も自分の屋敷 (ハウリ) を固めていた。すべての自分に属する者たち、自分の親戚<sup>35)</sup>、友人たちに武器の用意をさせた。

金曜日、〔ユースフ・〕ホージャムは礼拝に出なかった。ユースフ・ホージャム猊下は、**[p. 84 / fol. 42b]**「この者〔フダー・ヤール・ベグ〕を捕まえない限り、国 (ユルト) は整わない。むしろ、廃れてしまう」と心配した。クブチャク・クルグズたち (Qifçaq Qırğızlar) から数名の勇者たち<sup>36)</sup> を会合の部屋 (sorun hāna) の近くに隠し、「私が『バーバーク<sup>37)</sup>、煙草を入れよ』

30) D126; Or. 5338, fol. 45a; Or. 9660, fol. 45b; Or. 9662, fol. 56b は MV'MYN と誤記するが, Mu'min が正しい。

31) Qara-qır (<QRA QYR)。現カシュガル (喀什) 市の南方約 9km に位置する疏勒市に当たる (ジャリロフ・アマンバク, 河原弥生, 澤田稔, 新免康, 堀直『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』114 頁, 注 221)。

32) Or. 5338, fol. 45a による。D126 は「この秘密をホージャ・ムーミンとともにホージャ・アブド・アッラーにダルヴィーシュ・ブカーウルが明かした」, Or. 9660, fol. 45b は「この秘密をホージャ・ムーミン・ホージャム, ダルヴィーシュ・ブカーウルに話して説明した」, Or. 9662, fol. 56b は「この秘密をホージャ・アブド・アッラー・ホージャムとともにホージャ・ムーミン・ホージャムに明かした」と記す。

33) 本書 **[p. 47 / fol. 24a]**「日本語訳注 (2)」111 頁では sorun を「席」と訳したが, その注 139 で言及した語義 (a Royal assembly, a King's Court) がここでは当てはまるようである。

34) yurt hālqī. D126 は YVRVT と綴るが, Or. 9660, fol. 45b の YVRT による。

35) hvišāvand. D126 は HŠAVND と綴るが, Or. 5338, fol. 45b; Or. 9660, fol. 45b の H̱VYŠAVND による。

36) A グループの写本 (ms. 3358, fol. 97b ; Cf. Turk d. 20, fol. 72a; Cf. D191, fol. 82a) では、「クブチャク・クルグズたちのなかに、オルダに属する数人の勇者たちがいた。ホージャ・ユースフ猊下のバヤン・アガチャ (Bayan Ağača) という名の妻 (ahlīya) の集団 (jamā'a) の出であった」と記されている。

37) ホージャ・アブド・アッラーを指していると解される。彼は前述の本書 **[p. 82 / fol. 41b]**においてバーバーク (Bābāq) ・ホージャ・アブド・アッラーと記されている。なお, Or. 5338, fol. 45b では Būbāq, Or. 9660, fol. 45b では Bubāq と表記されており, **[p. 82 / fol. 41b]** の場合と同じである。



と言ったら、そなたたちは即座にフダー・ヤールを全力で持ち上げて太鼓の部屋 (ṭabl ḥāna) に連れて入り、しっかり拘束するように」と念を押し、〔クブチャク・クルグズたちを〕アルトゥンルク・サライの暗い入口の部屋 (dalan) に隠した。しかし、フダー・ヤールは来ないでいる。会合 (sorun) 〔に人びと〕は集まった。それでも〔フダー・ヤールは〕来ないでいる。彼自身の親戚<sup>38)</sup>、アブドゥ・ラヒーム・ベグ (‘Abdū Raḥīm Beg)<sup>39)</sup>に「フダー・ヤールについて探って来い。ここで相談がある。来ない理由は何であるのか」と命じた。

要するに、アブドゥ・ラヒーム・ベグが来て、フダー・ヤール・ベグを導いた。その夜、〔フダー・ヤールは〕危険な夢を見た。彼の女きょうだい (ham-šīra) は押しとどめた。「そなたは行かないように」と。しかし、死期がフダー・ヤール・ベグの襟をつかんでいた。〔フダー・ヤールは〕苦心して取り乱した言葉で、「私は私の一本の毛髪を減らすのにどんな限界があろう。私を捉えるのは動物か。動物をも簡単に捉えることはできない<sup>40)</sup>」と非常に頑固に馬鹿げたことを言い (muhmal yep), 馬に乗ってオルダに向かった。オルダに入り、皆が整頓しているのを見た。とても後悔したが、益するところはなかった。仕方なく中に入った。〔ユースフ・〕ホージャムが怒り坐っているのを見た。【p. 85 / fol. 43a】フダー・ヤール・ベグの全身に震えが生じた。ホージャムは一時のち、フダー・ヤール・ベグに非難のこもった言葉で「おお、フダー・ヤール・ベグよ。我々はそなたに関して何をしたのか。そなたは我々にこのような裏切りで敵対する。しかじかの時に、そなたはこの悪事をなした」と一つ一つ言及し<sup>41)</sup>、「我々はそれらを目に見た。さらに、我々はそなたが円熟するよう<sup>42)</sup> 努めた。今や杯は満ち溢れた。そなたからどれほど順番が過ぎ去ったか。今や順番は我々のものである。

#### 詩

その順番である狂人の時代は過ぎ去った  
誰にとっても五日間。我々の順番である

バーバーク、煙草をいれよ」と言った。クルグズたちが待ち構えていた。トゥーカール (Tūqāl)

38) ḥvīšāvand. D126; Or. 5338, fol. 45b; Or. 9662, fol. 57a は ḤYŠAVND / ḤŠAVND と綴るが、Or. 9660, fol. 46a の ḤVYŠAVND による。

39) Or. 5338, fol. 45b; Or. 9660, fol. 46a は ‘Abd Raḥīm Beg, Or. 9662, fol. 57a は ‘Abd al-Raḥīm Beg と表記する。

40) この直接話法の一節の意味をよく解し得ない。

41) D126 は zikri と記すのみであるが、Or. 9660, fol. 46b; Or. 9662, fol. 57b の zikr qīlīp による。Or. 5338, fol. 46b は zikr qīldīlar とする。

42) D126 は KMALYNKH と綴るが、Or. 5338, fol. 46a; Or. 9660, fol. 46b; Cf. Or. 9662, fol. 57b の KMALYNKĠH により kamālīnġa と読む。



という名の熱狂的な首領 (sardār) いたが、彼は即座に向かって行き、フダー・ヤールをしっ  
かり掴み、地面からリングを取るように、対面せずに<sup>43)</sup>、持ち上げて踏み段 (zīna-pāya) から  
連れて下りて行った。フダー・ヤール・ベグがいくら泣いて嘆願しても、効き目はなかった。  
家僕たちは皆、剣を抜き身になっていた。そして誰にも、この事を押しとどめ得る力はなかった。

会合 (sorun) にいたベグたちは皆、命からがらであった (jānlarī bilā qaldī)。特に、ハーキ  
ムのフシュ・キフェク・ベグは激しく身震いして、その顔はサフラン<sup>44)</sup> のように黄色くなった。  
ベグたちの誰にも力は残っていなかった。ホージャムはこのベグたちの状態に気付く、なだめ  
るために好意を示しはじめた。すなわち、「おおベグたちよ、安心せよ。敵は一人であった。  
罰を受けた」と言って、フダー・ヤール・ベグの【p. 86 / fol. 43b】捺印された手紙を取り出し  
た。書記 (munšī) が手紙を読んだ。その内容は先に言及〔された〕<sup>45)</sup>。ホージャムは「このよ  
うに自分のホージャに悪だくみをした者 (qara sanāgan) をどうすべきか」と言った。皆は「死  
がふさわしい」と言った。ホージャムは「殺せ」と言った。かのカルマクたちが殺した。さらに、  
「国に布告せよ。〔すなわち〕敵は一人であった。罰を受けた。他の者を不安にさせるな」と言った。  
さらにホージャムは、「国を片づけよ。一千の兵を集めよ。アルトゥチュに、アブドゥ・サッター  
ルに対して進むように」と命じた。そして、この兵をすぐに整え<sup>46)</sup>、バーラース (Bālās)<sup>47)</sup> のミ  
ールザーの出のミールザー・ダーニヤール (Mīrzā Dāniyāl) を軍の総司令官 (sipah sālār)<sup>48)</sup> にし  
て派遣した。ミールザー・ダーニヤールの息子、ハイダル・ベグ (Haydar Beg) は後にカシュ  
ガルのイシク・アガになった<sup>49)</sup>。

要するに、フダー・ヤール・ベグの息子がこの知らせを聞いて逃げ、アルトゥチュへ、アブ  
ドゥ・サッタール・ベグのもとに行った。アブドゥ・サッタール・ベグはこの出来事を聞いて  
恐れ、力が残らなかった。逃げようと考えた。それまでにミールザー・ダーニヤールがその軍  
とともにやって来て、アブドゥ・サッタール・ベグの屋敷をいくらか包囲して下馬した。アブ  
ドゥ・サッタールは矢を放った。これらの者たちにホージャムは、「そなたたちは矢を射るな。

43) ḥiyāl bolmay。Or. 9660, fol. 46b では ḥiyāl qılmasdın。

44) za'farān。D126 は ZĠFRAN と綴るが、Or. 5338, fol. 46b; Or. 9660, fol. 46b の Z'FRAN による。

45) Or. 9660, fol. 46b の bolgan により補う。

46) D126 は rāst のみ記すが、Or. 5338, fol. 46b の rāst qīlīp もしくは Or. 9660, fol. 47a の rāstlap による。

47) Barlas の r が脱落したのであれば、遊牧集団名のバルラスに当たろう。A グループの写本 Turk d. 20, fol. 73b では Barlās と書かれているように見える。

48) D126 は SH SALAR と綴るが、Or. 5338, fol. 46b; Or. 9660, fol. 47a; Or. 9662, fol. 58a の SPH SALAR による。

49) A グループの写本 (D191, fol. 84a; ms. 3358, fol. 100b ; Cf. Turk d. 20, fol. 74a) は「〔ミールザー・ダーニヤールは〕今〔の〕カシュガルのイシク・アガのミールザー・ハイダル (Mīrzā Haydar) の父である」と記している。

人を死なすな。逃げ去るならば逃がせ。後ろから追うな」と命じていた。この者たちは、そのために、矢を射なかった。夜になった。屋敷の一方面を **[p. 87 / fol. 44a]** なにもしないでおい  
た<sup>50)</sup>。結局、その夜半、〔アブドゥ・サッタールは〕好機をとらえ退避した。この軍は追跡しな  
いで、戦利品をとって満ち足りて戻った。

さて、この反乱者 (fitna-angīz) 〔アブドゥ・サッタール〕はカルタ・ヤイラグ (Kālta Yāylāg)<sup>51)</sup>、ケルフィン (Kelfin)<sup>52)</sup>を経てアクスに到り<sup>53)</sup>、アブド・ワッハーブ・ベグ<sup>54)</sup>に出来事、  
状況を説明した。アブド・ワッハーブ・ベグはその王 (tōrāsi) に、「おお王よ、ユースフ・ホー  
ジャムがヤルカンド、カシュガルを強固にして、フダー・ヤール・ベグを殺している。いつも  
我々は『このホージャたちはもうすぐ剣を振るわずにはいない。機会を見出せば、顔をそむけ  
る<sup>55)</sup>』』と言っていた。そなたたちは信じないでいた。今、ヤルカンド、カシュガルは手から去っ  
た」と手紙を書き、アブドゥ・サッタール・ベグとともにフダー・ヤールの息子に渡した。

この者たちはイラへ向かった。イラに到り、手紙〔の内容〕をダバチ王に泣きながら申し上げた。  
すなわち、「我々の父祖たちはそなたたちに仕えてきた。貢納 (bāj ḥarāj) をも多くして  
きた。我が父フダー・ヤール・ベグを、そなたはカシュガルに対するイシク・アガにした。〔ユー  
スフ・ホージャムは〕『お前はカルマクに心を寄せている』と、わが父を罪もないのに殺した。我々  
をも殺そうとするや、我々は千の困難さをもって逃げてきた。そなたが我が父の復讐をしてく  
れるように」と言った。カルマクたちは、ユースフ・ホージャムが確かに敵となっているのを知っ  
た。彼をイラから送り出したことを百、千と後悔して、「大軍が行くように」と相談した。また<sup>56)</sup>  
「今<sup>57)</sup>、軍が行くことはよくない。何故ならば、アムルサナーがシナ皇帝 (Ḥāqān-i Čīn) のもと  
に去り、大軍 **[p. 88 / fol. 44b]** とともに来るらしいという情報があるからである。今、カシュ

50) bī-kār qoydīlar. D126; Or. 9660, fol. 47b; Or. 9662, fol. 58b は BKAR と綴るが、Or. 5338, fol. 47a の BYKAR による。

51) カシュガル市街地から東北東およそ 70km に位置する Kalta Yailak Bazar に当たる。Sven Hedin, *Central Asia Atlas* (The Sino-Swedish Expedition, Publication 47, I. Geography, 1), Stockholm: Statens Etnografiska Museum, 1966, NJ43 の地図参照。

52) アクス市街地から西南およそ 130km に位置する Kelpin に当たる。Sven Hedin, *Central Asia Atlas*, NK44 の地図参照。

53) Or. 9662, fol. 58b は「夜、アブド・サッタールとともにフダー・ヤール・ベグの息子は逃げて、カルタ・ヤイラグとケルフィンを経てアクスに到った」と記す。

54) アクスのハーキムであるアブド・アルワッハーブ・ベグ (‘Abd al-Wahhāb Beg) (本書 **[p. 66 / fol. 33b]**「日本語訳注 (3)」45-46 頁参照)。

55) öyrür. D126 は AVRVR と綴るが、Or. 9660, fol. 47b; Or. 9662, fol. 58b の AVYRVR による。

56) Or. 5338, fol. 47b; Or. 9660, fol. 48a; Cf. Or. 9662, fol. 59a による補遺。

57) D126; Or. 5338, fol. 47b; Or. 9660, fol. 48a は HLY と綴るが、Or. 5338, fol. 47b の書写人とは別筆跡の修正 (HALA) にしたがって、hālā と読む。

ガルに一人の勇敢な人が使者となって行くように。ホージャムが以前のように交渉するならば良い。さもなくば、その後に軍が行くように」と相談した。そしてまた、クプチャク・クルグズたちのうちイラの地にいる者がいて、カルマクに服属して放牧していた (yaylar erdi)。ユーسف・ホージャムはイラから戻るときに、イスラームに援助するようにと手紙を送らせていた。それで、このクルグズたちも時を好機とみなし、クチャー (Küčār)<sup>58)</sup> を経てホタン<sup>59)</sup> に赴いていた。

さて、カルマクたちはこの事〔に〕<sup>60)</sup> とても消耗<sup>61)</sup> していた。まさにこのクルグズたちを戻らせることを口実にして使者が行くようにと合意した。さらにまた、暫く前からヤルカンド、カシュガル、ホタン<sup>62)</sup>、これらの城市から貢納が来なかった。そのために三百の好戦的な騎者ととともに、メデルジ (Mederji)<sup>63)</sup> という名の熱狂的なカーフィルがいたが、その者を行かせた。ヤルカンドのハーキム、ガーズイー、カシュガルのハーキム、フシュ・キフェク・ベグの宛名で、ニヤーズ・ベグ・イシク・アガの宛名で手紙を書き、カルマクの印章を捺して与えた。すなわち、「そなたたちは必ず使者を助けて、ホージャ・ジャハーンを、ホージャ・ユーسفを捕縛して、その家族とともにイラに送るよう。いきなりこの仕事で過ちを犯すならば、そなたたちは処罰にあたいする」と。このカーフィルは速やかに<sup>64)</sup>〔進んで〕<sup>65)</sup> アクスに来了。アブド・ワッハブ・ベグと会い、〔アクスを〕過ぎてウチュに来了。**[p. 89 / fol. 45a]** ホージャ・スィー・ベグと結束して (sözlärini bir qılıp) カシュガルに進んだ。

さて、使者が来るらしいという情報がカシュガルに届いた。ユーسف・ホージャムは〔それを〕聞いて、ダルヴィーシュ・ブカーウルを贈り物とともにそのもとに送った。密かに「使者の様子を見よ。悪いことでなのか、良いことでなのか、その状況が知られる。どうであろうとも、そなたは私に手紙を書いて送れ」と退去の許可<sup>66)</sup> を与えた。要するに、ダルヴィーシュ・ブカー

58) タリム盆地北辺のクチャのこと。本書 **[p. 77 / fol. 39a]** 「日本語訳注 (3)」56 頁の注 140 参照。

59) D126; Or. 9660, fol. 48a は HVTN と綴るが、Or. 5338, fol. 47b; Or. 9662, fol. 59a の HTN による。

60) Or. 5338, fol. 47b; Or. 9660, fol. 48a; Or. 9662, fol. 59b には方向格の語尾 -ğa が付されている。

61) kâhišliq. D126; Or. 9662, fol. 59b は KAHYŠLYQ と綴るが、Or. 9660, fol. 48a の KAHŠ により修正する。

62) D126; Or. 9660, fol. 48a は HVTN と綴るが、Or. 5338, fol. 47b; Or. 9662, fol. 59b の HTN による。

63) D126; Or. 5338, fol. 47b; Or. 9660, fol. 48b は MDRJY, Or. 9662, fol. 59b は MDRH と綴る。ハルトマン氏は Mederġi と読む (Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choğas in Kašgarien.” p. 241)。

64) tiz tund. D126; Or. 5338, fol. 48a; Or. 9662, fol. 59b は TYZ TVN と綴るが、Or. 9660, fol. 48b の TYZ TVND による。

65) Or. 5338, fol. 48a による補遺。

66) ruḥṣat. D126 は RVHŠH と綴るが、Or. 5338, fol. 48a; Or. 9660, fol. 48b; Or. 9662, fol. 60a の RHŠT による。

ウルはとても明敏で賢い人であった。二日〔進んで〕<sup>67)</sup>〔使者と〕出会い、その様子がおかしいのを見た。即座に手紙を書いて送った。

さて、〔ユースフ・〕ホージャムは至高なる神に難を避けて偉人たち (buzurglar) の靈魂に助力を求め、外面ではみずから武装して戦いの装備を整え、オルダに所属する人々を集めて一千の勇士を用意していた。使者が近付くと、国の人びと<sup>68)</sup>をその前に出した。結局のところ、使者は城市に入った。城門においてすべての人が装具をもって現れているのを見た。それを見て、カーフィルたちの心に震えが生じた。仕方なくオルダの前に<sup>69)</sup>行った。満場の人<sup>70)</sup>がみな完璧であり武装しているのを見た。このカーフィルたちはオルダの中に入った。この一団の人びとを見て、正気が頭から去った。心から望みを失った。仕方なく会合の部屋 (sorun hāna) に入った。九つの **[p. 90 / fol. 45b]** 門 (darband) のそれぞれの所で数人のカーフィルを止め押さえ、五、六人ほどのカーフィルが中に入り、ホージャムにお辞儀した。ホージャムは王 (トレ) の健勝を訊ね、その後、イラの状況を訊ねた。このカーフィルたちは全く心を静めて (kamāl dil-jam'lik birlä) 返答<sup>71)</sup>した。このカーフィルたち〔に〕<sup>72)</sup>神への恐れ (haybat-i haqq) が生じた。際限なく謙遜して退去した。ホージャムは称賛されるべき至高なる神に感謝称賛して、「カーフィルであるとしても、客である。客に敬意を払うことはスンナである。預言者のハディース、くそなたたちは客人を丁重にもてなせ。もしカーフィルであっても。すなわち、客に敬意を示せ、いくらカーフィルであるとしても」と命じた。

それで、このハディースにもとづきカーフィルたちに、ス門 (Sū Darvāzasi) により近い屋敷 (ハウリ) を割り当て、そこに下馬させた。馬、乗用動物を野原 (şahrā) で世話していた。カーフィルたちはフシュ・キフェク・ベグを呼び出させて、王の手紙、捺印を見せた。フシュ・キフェク・ベグは、「私はムスリムである。王を恐れて一人のムスリムを苦しめれば、神は正当とみ

67) Or. 9662, fol. 60a; Cf. Or. 9660, fol. 48b による補遺。

68) yurt ḥalqī. D126 は YVRVT と綴るが、Or. 5338, fol. 48b; Or. 9660, fol. 49a; Or. 9662, fol. 60a の YVRT による。

69) orda aldīga. D126 は orda とのみ記す。Or. 5338, fol. 48b は ordağa と記す。Or. 9660, fol. 49a; Or. 9662, fol. 60a による。

70) 「満場の人」という訳語は確実ではない。D126 は BR TALAY ADM, Or. 9660, fol. 49a; Or. 9662, fol. 60a は BR BALAYY ADM と綴るが、Or. 5338, fol. 48b の BR BALAY ADM により bar bālā-yi ādam と読む。ヌールマノヴァ氏は A グループの写本 (D191, fol. 86a) の ADM BR BALAY ADM を「満場の人 (tolğan adam)」とカザフ語訳している (Aytjan Nurmanova, *Qazaqstan Tarikhī Turalī Türkī Derektemeleri IV tom. Mūkhammed-Sadiq Qashghari, Tazkira-yi 'azizan*, Almatī: Dayk-Press, 2006, p. 151)。

71) D126 は HVAB と綴るが、Or. 5338, fol. 48b; Or. 9660, fol. 49a; Or. 9662, fol. 60b の JVAB により jawāb と読む。

72) Or. 5338, fol. 48b; Or. 9660, fol. 49a; Or. 9662, fol. 60b には方向格の語尾 -ğa / -gä が付されている。

なさない、そのみならず、我々、我が父祖はこの聖域のハーンから<sup>73)</sup> 塩を食してきている。恩知らずな事をすれば、最後の審判の日、神と預言者の前で我々は黒い顔になってしまう。もし神から天命がないのであれば、王は私の一本の毛髪も減らすことはできない。私はこのようにひどい悪名を引き受けるよりも、王の手中で死ぬほうがましである」**[p. 91 / fol. 46a]** と言って同意しなかった。さらに、「ホージャムはとても賢い人である。策略、罠に引っ掛からない。そなたたちは無駄にこのような事に努めるな」と言った。

しかし、ベシュケリム (Beš-kerim)<sup>74)</sup> のハーキム、ムハッラム・ベグ (Muḥarram Beg)、ファイザーバード (Fayḍ-ābād) のハーキム、ニヤーズ・ベグ (Niyāz Beg)、数名のペテン師たちはフシュ・キフェク・ベグに隠れて使者のカーフィルたちに、「我々はどうなろうとも、王の命令にそむかない。我々にホージャは必要でない。この国々をホージャたちは荒廃させたのである。〔我々はそなたたちから別れれば、クルグズたちの馬蹄に踏みつけられる〕<sup>75)</sup>。得策は次のとおり。ユースフ・ホージャムはとても利口な人である。その方を自身のオルダで捕まえることはできない。まさにこの屋敷に呼び出せば、仕方なく来る。我々は数人の勇者を物置(qaznaq)に隠せば、若干の者に鉄砲、若干の者に剣を与えれば、ホージャムが家に入り坐った時に、どんな武器でもチャンスがある物で殺すことができる。それから、我々はヤルカンドを一日で取る。何故ならば、〔ヤルカンドにいる〕ホージャ・ジャハーン・ホージャムは単純な人であるから」と言った。この得策はすべてのカーフィルたちにとって道理にかなった。客もてなしの用意に取り掛かった。

この情報がユースフ・ホージャム猊下の耳に入った。ホージャムは至高なる神に難を避けて偉人たちの靈魂に助力を求め、祈祷 (munājāt) に手をかがげて次のように言った。「おお神よ、私は罪深く黒い顔である。私はそなたの命令を受けて服従できなかった。イスラーム **[p. 92 / fol. 46b]** の道において軟弱なことをした。おお神よ、この罪深い者の遅滞を、そして罪を見ないで、ムハンマド・ムスタファー<神が彼に祝福と平安をあたえますように>への敬意により、このあまたのカーフィルたちの間で無力なことをするな、そしてイスラームに勝利を授与せよ」と言って泣きながら、その眼は眠りに落ちた。夢において、一人の光輝く男が「おお、子よ、何故にそなたは悲しんでいる。勝利幸運はイスラームの側にある。苦悩するな。客もてなしに拒否<sup>76)</sup> せず行くように」と言って消えた。ホージャムは頭を上げた。家の中は芳香に満

73) bu āstānanīñ ḥānīdīn. Or. 5338, fol. 49a は「この聖域の食堂から (bu āstānanīñ aš ḥānasīdīn)」と記す。

74) カシュガル市の東北方向約 15km に位置する (ジャリロフ・アマンバク、河原弥生、澤田稔、新免康、堀直『『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』169 頁、注 387)。

75) Or. 9660, fol. 50a; Cf. Or. 9662, fol. 61a による補遺。

76) ibā. D126; Or. 5338, fol. 50a は AYBA と綴るが、Or. 9660, fol. 50b; Or. 9662, fol. 62a の ABA による。

ちている。この良きお告げに感謝するため洗身（タハーラ）をあらたにして、二回（ラクア）感謝〔の礼拝〕<sup>77)</sup>、浄め（ウドゥー）を遂行した。

翌朝、使者が来て、ホージャムを客もてなしに招いた。ユースフ・ホージャム猊下は三百人を完璧に武装させ、皆に鉄で身を覆わせ（āhan-pūš äyläp）、使者の館（älči ḥāna）に入れた。このカーフィルたちの眼に、このムスリムたちの一人ひとりが何人かに見えた。〔カーフィルたちは〕全く恐怖にとらわれ、「我々を捕まえに来ている」と疑った。絶望して自分の命の心配にさらされた。悪だくみをする力が残っていなかった。神への恐れが生じた<sup>78)</sup>。身体に震えが生じた。心底からもてなして（ḥvušluq qīlīp）仕え、客を見送った。ホージャムはオルダに戻り、**[p. 93 / fol. 47a]**〔神への〕感謝称賛を表した。使者のカーフィルたちの心から恐れ悲嘆は取り去られなかった。カシュガルに望みを失い、ユースフ・ホージャムから退去の許可を得て、ヤルカンドへ進んだ。

ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下は一人の特別な家僕（ḥādim-i ḥāṣṣ）により別の道でホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下に手紙を送った。すなわち、「この使者のカーフィルは悪意<sup>79)</sup>をもって来ているらしい。カシュガルで策略の罠にかけようと努めた。しかし、至高なる神が〔我々を〕守った。〔カーフィルは〕それに絶望して不幸な足をヤルカンドへ向けた。〔ヤルカンドの者たちに〕準備させ見張らせろ。この事について自らの怠慢は許されるとみなさせるな。〔このカーフィルがヤルカンドにいる間は、オルダを空にするな。外に足を向けさせるな〕<sup>80)</sup>。特にガーズイー・ベグ（Ġāzī Beg）<sup>81)</sup>に百千の指示をして行かせるな。彼の言葉を受け入れさせるな。オルダの人びとはみな武器を整え、オルダを警備せよ」。

#### 詩

友人の様相が敵から来れば、心には後で迫害が  
敵によりも多くの<sup>82)</sup>用心を友人にせよ

77) Or. 5338, fol. 50a; Or. 9660, fol. 50b; Cf. Or. 9662, fol. 62a により namāz-i を補う。

78) wāqī‘ boldī. D126; Or. 5338, fol. 50a は wāqī‘a boldī と誤記するが、Or. 9660, fol. 51a; Or. 9662, fol. 62a による。

79) bad-nīyat. D126 は bad-diyānat, Or. 5338, fol. 50a は bad-ḥiyānat, Or. 9662, fol. 62b は bad-nīyat bad-ḥiyānatlik, Or. 9660, fol. 51a は bad-nīyatlik と記す。

80) Or. 9660, fol. 51a; Cf. Or. 9662, fol. 62b による補遺。

81) ヤルカンドのハーキムである（前述の本書 **[p. 88 / fol. 44b]** 参照）。

82) köprāk. D126 は KVBRVK と綴るが、Or. 5338, fol. 50b; Or. 9660, fol. 51a; Or. 9662, fol. 62b の KVBRAK による。



そしてまた、ホージャ・ヤフヤー (Hōja Yahyā)<sup>83)</sup> とともにスイッディーク・ホージャム (Siddiq Hōjam)<sup>84)</sup> にも別の手紙を送った。すなわち、「おお、弟たち<sup>85)</sup> よ、次のことを知り賢明であれ。幸運 (dawlat) に惑わされ、めぐりくる出来事 (dawrān ḥādīṣa<sup>86)</sup> larī) に安心するな。敵<sup>87)</sup> はどれほど卑しくとも、心を動かさせる。木の切れ端はいかに小さくとも、眼を曇らせる。敵の手落到ちてから後悔しても益はない。我が年長の帝王 (aka pādīšāhīm) [ホージャ・ジャハーン] はとても托鉢僧のように純真 (darvīš sāda) である。[p. 94 / fol. 47b] その心はとても温和である。そして真実を話す人である。それ故、いくらかの敵たちの甘言<sup>88)</sup> を真実と思っている。そして何事も〔神に〕信頼を寄せている。その信頼は正しいとはいえ、自身の場合に〔のみ〕役に立つのである。マスナヴィー<sup>89)</sup> [に次のように引かれている]。

〔詩〕

預言者が大きい声で言った

神を信頼してラクダの膝を結びつけよ

もしもガーズイー・ベグの言葉をホージャム [ホージャ・ジャハーン] が受け入れるとしても、そなたたちは拒否するように。オルダから外に出るな。手紙おわる。平安あれ」。

そして、この〔先の〕手紙がホージャム猊下 [ホージャ・ジャハーン]<sup>90)</sup> に届くやいなや、皆は用心していつも備えていた。オルダを固めた。使者のカーフィルたちがヤルカンドに入った。オルダに入り、ホージャム猊下に面会した。ここでも彼らの身体に震えが生じた。カシュガル〔のオルダ〕<sup>91)</sup> より強固であると見た。「このホージャたちは、皆が用意準備していて、一人ひとり (bir biridin) 賢いようだ。王(トレ)から顔をそむけている」と〔の思いが〕心をよぎった。

83) ホージャ・ジャハーンの末弟ホージャ・アブド・アッラーの子 (本書 [p. 65 / fol. 33a] 「日本語訳注 (3)」44 頁参照)。

84) ホージャ・ジャハーンの子 (本書 [p. 57 / fol. 29a] 「日本語訳注 (3)」36 頁参照)。

85) 実際には、ユースフ・ホージャムにとって「甥たち」である。

86) D126 は ḤADSH と綴るが、Or. 9660, fol. 51b; Or. 9662, fol. 62b の ḤADSH による。

87) dušman. D126; Or. 5338, fol. 50b; Or. 9660, fol. 51b; Or. 9662, fol. 62b は DVŠMN と綴る。以下、この綴りについては注記しない。

88) sačuklikini. sačuk (<SJVK) の読み (sachuk) と意味 (sweet-toned) は、Robert Barkley Shaw, *A Sketch of the Turki Language as Spoken in Eastern Turkistan (Kāshghar and Yarkand)*, Part 2: Vocabulary, Turki-English, Calcutta, 1880, p. 121 による。

89) ルーミーの著『精神的マスナヴィー』(Maṣnavī-yi ma'navī) を指しているであろう。

90) Or. 9660, fol. 51b; Or. 9662, fol. 63a による。

91) A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 78b; D191, fol. 89b; ms. 3357, fol. 108b) による補遺。



その王から平安の祈願<sup>92)</sup>の代わりにもたらししていた不純のまじった言葉で、イラに来るよう指示した。王が親切に面会するという好意を表明した。ホージャム猊下も温和に返答した。イラに行くことを運命にまかせた。〔カーフィルたちを〕<sup>93)</sup>使者の館に下馬させた。数日そこにいた。

さて、ホージャム猊下はガーズィー・ベグに相談を [p. 95 / fol. 48a] もちかけて次のように言った。「おお、ハーキム・ベグよ、何年もの間、我々の生涯はカルマクたちへの奉仕で終わっている。我々が来世の旅の糧食 (zād-i rāhila<sup>94)</sup>) のためにひとつのイスラームを明白にするならば〔よいであろう〕。預言者のハディース——<死ぬ人はその時より前に知ることはなく、すでにジャーヒリーア (無知) の死に方をした><sup>95)</sup>、すなわち、かの人は自分の時の帝王を知らないで死んでいる、そして、かの人は穢れた無知とともに死んでいる——。<神に栄光あれ>、至高なる神は我々をイスラームの宗教において創造している。善悪をわきまえるほどの英知を授けている。誰でもひとつの良い事を引き起こすならば、その報酬は最後の審判までその人のものである。それ故、すべての信心の最も優れているのは聖戦 (ġazzāt) である。そのため、過ぎ去った昔の者たちは聖戦から手を引かないでいる。この事に身命を捧げている (bu iṣdā baš berip durlar)。<もしおまえたちの中に〔千人〕いるならば、〔二千人に〕勝てるであろう><sup>96)</sup>。すなわち、誰でも戦いにおいて、ムスリムが一人であれば、カーフィルが二人であれば、逃げることは正しく<sup>97)</sup>ない。何故ならば、自分自身が一人の者であり、信仰が〔もう〕一人であるから。しかし、カーフィルが三人であれば、ムスリムが一人であれば、逃げるように。もし逃げなけ

92) du‘ā-yi salām. D126; Or. 5338, fol. 51a; Or. 9662, fol. 63a は D‘A SLAM と綴るが、Or. 9660, fol. 52a の D‘AY SLAM による。

93) Or. 5338, fol. 51a; Or. 9660, fol. 52a; Or. 9662, fol. 63b による補遺。

94) D126 は RAHLH と綴るが、Or. 5338, fol. 51a; Or. 9660, fol. 52a; Or. 9662, fol. 63b の RAHLH による。

95) このアラブ文「ハディース」の訳文は確実ではない。Or. 5338, fol. 51a-b; Or. 9660, fol. 52a; Or. 9662, fol. 63b および A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 79a; D191, fol. 90a; ms. 3357, fol. 109a) を対照した。

96) 不完全なアラブ文であり、綴りに誤りがみられる (D126; Or. 5338, fol. 51b; Or. 9660, fol. 52a; Or. 9662, fol. 64a)。すなわち、YLGBVN でなく YGLBVN が正しい。A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 79b; Cf. D191, fol. 90a-b; ms. 3357, fol. 109b) では「クルアーンの一節 (āyat-i karīma)」と明記して<もしおまえたちの中に千人いるならば、二千人に勝てるであろう>と記す。ただし両者ともに、この一節の部分がある『クルアーン』8-66 のアラブ文のうち、yakun (<YKN) を kāna (<KAN) に変えている。アラブ文のテキストについては、三田了一 (訳注)『日亜対訳・注解 聖クラーン』日本ムスリム協会日訳クラーン刊行会、1972 年、211 頁 (1982 年改訂版、220 頁) 参照。

97) D126; Or. 5338, fol. 51b は DVRST, Or. 9660, fol. 52b は DVRVST, Or. 9662, fol. 64a は DVRVS と綴る。durust または durus と読む。

れば、〔それは〕無知〔ゆえ〕である。神が望むならば、これらの城市<sup>98)</sup>から分裂は現れない。カルマクたちの間は分裂である。自らの状況に煩わされている。我々に対して<sup>99)</sup>軍を率いるほどの力はない。〔我々自身の自由意思でカーフィルに服従することは、イスラームの宗教にとって良くない〕<sup>100)</sup>。おお、ガーズイー・ベグよ、〔これに関して〕<sup>101)</sup>そなたは何と言うか」と、イスラームの勝利に導いた。しかし、ガーズイー・ベグに至高なる神は永遠において **[p. 96 / fol. 48b]** 不運を割り当てていた。決して<sup>102)</sup>〔この〕<sup>103)</sup>〔ホージャム猊下の〕言葉は〔彼を〕感動させなかった。〔ガーズイー・ベグは〕〔ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下の言葉を外面では〕<sup>104)</sup>理解したことにして (ma‘qūl kōrgān bolup), 「カーフィルたちの四散状況がよく明らかになるまで、我々は数日、待つて留まっておれば」と得策を示した。ホージャム猊下はその言葉を受け入れて留まった。その間に数日が経った。

結局、この使者はガーズイー・ベグに、ニヤーズ・ベグに王の捺印された手紙を示した。この者たちは心底から同意し、裏切りの相談をした。得策は次のように定まった。ホージャムをオルダで捕まえることはできない。何故ならば、七百の勇敢な戦士がいつも揃っていたからである。ガーズイー・ベグは、「使者が我々の家で病気になって横たわれれば、ホージャムは仕方なく病状を見るためにやって来る。カルマクたちが準備しておれば、まさにこの策略で捕縛できる」と言い、〔皆は〕合意した。使者のカーフィルはガーズイー・ベグの家に行き、病気になり横たわった。以前のカラ・ハーンの地位にあった (qara ḥānnīn ornīda turḡan) カルマクたちを密かに連れてきて、皆が武具の備えをしていた。ガーズイー・ベグ自身が行き、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下を招いて次のように申し上げた。「今日<sup>105)</sup>、拙宅にて<sup>106)</sup>会合を開けば (sorun tüzsalār) 〔よいでしょう〕。使者のカーフィルは重い病気になっています。回復の兆候はありません。〔使者は〕『ホージャムが私と会うならば、私には秘密の言葉があったのに』と言って動揺しています。また今日、**[p. 97 / fol. 49a]**私はノウルーズ(新年)の見世物 (navrūzluq ma‘rakasī) を用意していました」と申し上げた。ホージャム猊下は行くことを約束した。

98) A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 79b; D191, fol. 90b; ms. 3357, fol. 110a) では「七つの城市」(yetä šahr / Yetä Šahr) とする。

99) üzämizgä. D126; Or. 5338, fol. 51b は AVZVMYZKH と綴るが、Or. 9660, fol. 52b の AVZAMYZKH または Or. 9662, fol. 64a の AVZHMYZKA による。

100) Or. 9662, fol. 64a; Cf. Or. 9660, fol. 52b による補遺。

101) Or. 9660, fol. 52b による補遺。

102) hargiz. D126; Or. 5338, fol. 51b は HRKYZ と綴るが、Or. 9660, fol. 52b の HRKZ による。

103) Or. 9660, fol. 52b; Or. 9662, fol. 64a による補遺。

104) Or. 9660, fol. 52b による補遺。

105) bu kün. D126 は BKNV と綴るが、Or. 5338, fol. 52a; Or. 9660, fol. 53a; Or. 9662, fol. 64b の BV KVN による。

106) meniñ kulba-yi ḥānamda. 但し ḥānamda は ḤANMDA と綴られている。

しかし、ガーズイーが帰った後、すべての皇子 (pādišāhzāda) たち、オルダの貴人たち (orda uluġlari) が集まり、ホージャムがガーズイー・ベグの所に行くことを引き止めた。皆は一致して次のように申し上げた。「ガーズイー・ベグの悪賢さは以前から経験済みである。その者の言葉はすべて策略である。それを信じるべきではない。〔使者のカーフィルの様子はおかしい〕<sup>107)</sup>。使者の威圧はやまない。この事についてユースフ・ホージャム猊下は強調して手紙を送ってきている。もし猊下が行くならば、突然に敵が威圧するならば、我々はユースフ・ホージャム猊下に何と返答すべきなのか」と言って、皆は引き止めた。

さて、ガーズイー・ベグは家に行き、カーフィル〔の顔〕に山の紅 (taġ aġliki) をつけ、何杯かのザクロの果汁を飲ませた<sup>108)</sup>。布団と枕を敷き、横たえさせた。それから、ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウル (Muḥammad ‘Abd Allāh Bukāvul) というホージャムに古くから仕えていた純真な人がいたが、その者を呼び出し、カーフィルの病気を見せた。ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウルは、このカーフィルが咳をすれば、その口から〔少しずつ〕<sup>109)</sup> 血が出ていて、敷物、枕の上に安らかに横たわってられないのを見た。〔このカーフィルは〕「ホージャムが来て私に会うならば、私にはいくらかの言葉があった。私の病気は重い。そなたが行って知らせるならば、素早くホージャムが来るならば」と言い、ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウルを出発させた。

〔ムハンマド・アブド・アッラー・ブカーウルは純真な心の人であった〕<sup>110)</sup>。この策略を真実と信じ、[p. 98 / fol. 49b] 急いでホージャムの御前に来た。入って、使者の状態を、ガーズイー・ベグの託した言葉を説明した。誰もその言葉が気に入らなかった。シハーブ・アッディーン・ブカーウル (Šihāb al-Dīn Bukāvul)<sup>111)</sup> の心に、この者もガーズイー・ベグとひとつになったのだらうという思いがよぎった。ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下は皆が引き止めるのを受け入れないで、「そなたたちは皆、備えているように」と〔かねてから〕言っていた言葉で指示し、ホージャ・ヤフヤー・ホージャム猊下を同行させ、家僕たちの多くを<sup>112)</sup> オルダで警

107) Or. 9660, fol. 53a; Cf. Or. 9662, fol. 65a による補遺。

108) ičürdi. D126; Or. 9660, fol. 53a は AVJVRDY と綴るが、Or. 5338, fol. 52b; Or. 9662, fol. 65a の AYJVRDY による。

109) laḡt laḡt (Or. 9660, fol. 53b). D126; Or. 5338, fol. 52b; Or. 9662, fol. 65b は AVJ AVJ と綴るが、読みと意味は不明である。

110) Or. 9660, fol. 53b; Cf. Or. 9662, fol. 65b による補遺。

111) D126 は ŠHAV DYN BKAVL と綴るが、Or. 9660, fol. 53b; Or. 9662, fol. 65b の ŠHAB ALDYN BKAVL による。

112) tolalarini. D126 は TVLARYNY と綴るが、Or. 9660, fol. 54a; Or. 9662, fol. 65b の TVLALARYNY による。

備の役に置いて、少数の者とともに馬に乗り、＜神を畏れる者に＞〔『クルアーン』65-2〕<sup>113)</sup>を詠み、ガーズイー・ベグの<sup>114)</sup>墮落の家に向かった。

ガーズイー・ベグは以前より百倍もの丁重と敬意をもって〔ホージャム猊下を〕家に連れて入った。〔ホージャム猊下は〕使者のカーフィルが布団に横たわっていて安らかでないのを、しかし、その顔から様々な敵意と背信が表れているのを見た。しかし、ホージャムは〔本心を〕決して表に出さなかった。神を信賴 (tawakkul) して坐していた。わずかな時間が経っていた。一度、チャイ（茶）が運ばれてきた。まさにこの状態のときに何人かのカーフィルが入ってきて、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下を、ホージャ・ヤフヤー・ホージャムを、王の命令であると言って捉え、その短刀<sup>115)</sup>を取り、客間 (mihmān hānasi) に連れて入り隠した。そして、外の門を閉じて、仕えに来ていた家僕たちをすべて捕縛した。目的は、[p. 99 / fol. 50a] まさにこの知られないままに〔オルダに〕走って行って略奪するまで、オルダに人が知らせない<sup>116)</sup>ようにするためである。

さて、ホージャ・スイッディーク・ホージャム猊下をはじめ幾人かの王子 (šahzāda) たちはオルダの城壁 (orda sāfilları) に上がり眺めていた。ガーズイー・ベグの〔家の〕門<sup>117)</sup>がはっきり見えていた。大騒動が起き〔門が閉じられた〕<sup>118)</sup>のを見た。異変が生じたのを確かに知った。この者たちも自分のオルダの門を固め、皆が武器を用意して備えていた。まさにこの時、カーフィル、ムスリムからなる二、三百人がオルダへ走って行った。〔オルダの〕<sup>119)</sup>門が固められている〔のを見た〕<sup>120)</sup>。先に行った者を上から〔突き、留まっていた者を矢で〕<sup>121)</sup>射た。仕方なく全員が退却した。王子たちはオルダの一方を壊し、スイッディーク・ホージャム猊下がシハーブ・

113) ＜神は神を畏れる者に一つの出口を造りたまい＞の一部。Muhāmmād Sadiq Qāšqāri, *Tāzkirā'i Āzizan*, Naširgā täyyarlıguči: Nijat Muħlis, Šāmsidin Āmāt, Qāšqār Uyğur Nāširiyati (穆罕麦提・薩迪克『和卓伝（維吾尔文）』喀什維吾尔文出版社, 1988年) 169頁, 注1参照。

114) D126は属格 (-niq) を付さないが, Or. 5338, fol. 53a; Or. 9660, fol. 54a; Or. 9662, fol. 65b には付されている。

115) ḥanjar. D126はHJNRと綴っているようであるが, Or. 5338, fol. 53a; Or. 9660, fol. 54a; Or. 9662, fol. 66aのHJNRによる。

116) D126; Or. 5338, fol. 53aはḥabar bergäyとするが, Or. 9660, fol. 54aのḥabar bermegäyによる。

117) D126はordaとするが, Or. 9660, fol. 54a; Or. 9662, fol. 66aのdarvāzaによる。

118) Or. 9662, fol. 66aによる補遺。

119) Or. 9660, fol. 54bによる補遺。

120) Or. 9660, fol. 54bによる補遺。

121) Or. 9662, fol. 66bによる補遺。

アッディーン・ブカーウル<sup>122)</sup>とともに先頭〔になり〕<sup>123)</sup>、三十五人の勇者たちが城市の外に出て、ホタンの方に難を避けた。家僕のひとりムハンマド・ミーラーフル (Muḥammad Mīr-āḥvur)<sup>124)</sup>を、「そなたはユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下に知らせを届けるように」と言って、カシュガルに向かわせた。

さて、スイッディーク・ホージャムの背後からカーフィルたち三百人が追ひ、ザラフシャーン河 (daryā-yi Zar-afšān)<sup>125)</sup>で追いついた。スイッディーク・ホージャムは眼を天に当て (kōkkā tegip), ムナージャート (munājāt, 祈祷)<sup>126)</sup>に口を開いた。

ムナージャート

神よ、そなたを私はとても信愛する

何も残らない人はそなたに敬意をこめて

神よ、この出来事において私に手を貸せ

神よ、まさにこの時、**[p. 100 / fol. 50b]** 我が叫びに到れ

ムナージャートは神の御前に受け入れられた。皆に勇気が生まれ、後ろに戻った。この状況において、ひとりのカーフィルが罵りの言葉を口にした。シハーブ・アッディーン・ブカーウルが巧みな射り方 (čābuk-andāzliq) により一本の矢を取り、聖戦の決意 (nīyat-i ǧazāt) を言って、その口を標的にして射た。それでカーフィルは頭をそらそうとして間に合わず、〔矢は〕口に当たり、首<sup>127)</sup>から一ガス (gaz)<sup>128)</sup>突き出た。カーフィルは矢をくわえて逆さまに馬から落ち、死体の魂は地獄へ行った。それを見て、来ていたカーフィルたちは皆、後ろに戻り、〔ヤルカ

122) D126 は ŠHAV DYN BKAVL, Or. 5338, fol. 53b は ŠHAV ALDYN BKAVL と綴るが, Or. 9660, fol. 54b; Or. 9662, fol. 66b の ŠHAB ALDYN BKAVL による。以下、この人名の綴りの相違については言及せず、シハーブ・アッディーン・ブカーウルと表記する。

123) Or. 5338, fol. 53b; Or. 9660, fol. 54b; Or. 9662, fol. 66b により補う。

124) Or. 9660, fol. 54b は Muḥammadī Mirzā Āḥvun, Or. 9662, fol. 66b は Muḥammadī MRAQVR と記す。なお、ミーラーフルは「厩舎長、主馬頭」の意味である。

125) ヤルカンド・オアシスを形成する主要な河。

126) ムナージャートは、スーフィズムの用語で神との親密な対話のことをいう（矢島洋一「ムナージャート」大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』977頁）。

127) gājgā. D126 は KJHKH と綴るが, Or. 9660, fol. 55a; Cf. Or. 5338, fol. 53b の KJHKH による。

128) ガズは長さの単位であるが、「尺」「cubit (腕尺) または 24 指」「45 インチ = 1.143m」「2 尺 (66.67m)」と資料によりかなり差がある（堀直「18～20 世紀・ウイグルの度量衡について」『大手前女子大学論集』第 12 号、1978 年、59 頁参照）。

ンド城市の〕ハーナカーフ門 (Hānaqāh darvāzasi)<sup>129)</sup> に至るまで後ろを見ることができない<sup>130)</sup> ほど逃げた。

スイッディーク・ホージャム猊下は勇者たちとともに〔神に〕感謝称賛の念を捧げ、ホタン (Hotan) の方へ向かった。ホタンに近づいたとき、ガーズイー・ベグの家僕のひとりがホタンに来ていたが、その者〔と〕遭遇した。彼をつかまえて、「そなたは行って、ガーズイーという・・・<sup>131)</sup> に次のように言え。父たる我が帝王 (dada pādīšāhīm)<sup>132)</sup> の一本の毛髪にも害を及ぼさないように。もし危害を及ぼすならば、神に誓って私は、ホタン<sup>133)</sup> の中にいるガーズイー・ベグの妻子たち (ahl ‘iyāllar) を、一族親戚たち (uruğ qayašlar) を捕縛して連れて行き、ヤルカンドの城門の前で羊のように喉を切り、その血で水車を回して<sup>134)</sup> 粉をひかなければ、我が名はホージャ・スイッディークにならない<sup>135)</sup>」と言って誓っていた。[p. 101 / fol. 51a] その後、ホタンの城市に近づいた。国の人びとが出迎え、尊敬の表明を受けて城市に入った。ホージャ・シャムス・アッディーン・ホージャム (Hōja Šams al-Dīn Hōjam)<sup>136)</sup> と会見し、ガーズイー・ベグの息子ウマル・ベグ (‘Umar Beg)<sup>137)</sup> がホタンに対するハーキムであったが、その者を即座につかまえ、獄に入れた。〔そして別の息子もそこにいたが、その者をつかまえ、獄に入れた〕<sup>138)</sup>。〔すべての一族親戚を捕まえ、獄に入れた。イラから来たクブチャク・クルグズたちがホタンにいた。その首領ウマル・ミールザー (‘Umar Mīrzā) という者がいた。この者たちにガーズイー・ベグの息子たちの略奪を命じた〕<sup>139)</sup>。そしてまた命令<sup>140)</sup> した。ホタンから七千の兵が二日のうちに揃った。ウマル・ミールザーをはじめすべてのクルグズたちを同行させ、ヤルカンドへ進

129) この門については、本書 [p. 41 / fol. 21a] 「日本語訳注 (2)」105 頁参照。

130) qaray almadılar. D126; Or. 9662, fol. 67a は QRALAMADY と綴るが、Or. 9660, fol. 55a の QRAYALMADYLAR による。

131) JVLY HVR の読みと意味を解し得ない。ガーズイー・ベグをあざける呼び名であろうか。A グループ写本の ms. 3357, fol. 117a は「ガーズイー、ロバ追い (har-bān) に、牛飼い (gāv-bān) に」とする。

132) スイッディーク・ホージャムの父ホージャ・ジャハーンを指している。

133) Hōtan (<HVTN)。D126 は Hōtan と Hotan (<HTN) という二つの表記を混用している。以後、この表記の違いについては注記しない。

134) yūrūtüp. D126 は TVRTVB と綴るが、Or. 5338, fol. 54a; Or. 9660, fol. 55a の YVRVTVB による。

135) スイッディークの名がすたるということであろう。

136) ホージャ・ジャハーンの末弟ホージャ・アブド・アッラーの長子(本書[p. 65 / fol. 33a]「日本語訳注(3)」44 頁参照)。

137) ウマル・ベグの名は Or. 9660, fol. 55b; Or. 9662, fol. 67b および A グループの写本 (Turk d. 20, fol. 83b; D191, fol. 95a; ms. 3357, fol. 117b) では記されていない。

138) Or. 5338, fol. 54a; Cf. Or. 9660, fol. 55b; Or. 9662, fol. 67b による補遺。

139) Or. 9662, fol. 67b; Cf. Or. 9660, fol. 55b による補遺。

140) amr. D126 は ‘MR と綴るが、Or. 5338, fol. 54a; Or. 9660, fol. 55b; Or. 9662, fol. 67b の AMR による。



んだ。ガーズイー・ベグの息子を、一族親戚たちを枷、鎖でつないで連れていった。責め苦、罰を与えながら連れて進んだ。これらの者たちは来る途中である。

物語の章。ムハンマディー・ミラーフル (Muḥammadī Mīr-āhvur)<sup>141)</sup> について聞かねばならない。

さて、ムハンマディー・ミラーフルはユースフ (Yūsuf) という名の家僕を同行させ、木曜日であったが、まさにそこから<sup>142)</sup> 進んで夜を徹し、翌日の金曜日、朝食の時間に横門 (yan işik) からカシュガル<sup>143)</sup> に入り、ユースフ・ホージャム殿下に会って出来事を説明した。さて、ユースフ・ホージャムはその言葉を聞き、手で膝を打ち、身体にある毛髪の一本一本<sup>144)</sup> がきらめく刃針となり、衣服から先端を出した<sup>145)</sup>。その後、[ユースフ・ホージャムは]「敵が察知しないよう、ムハンマディー・ミラーフルを隠しておけ」と命じた。ご自身はカラキル (Qara-qīr)<sup>146)</sup> という村 (mawdi‘) に出て下馬した。すべての騎兵随員 (ḥayl ḥaṣam) が揃っていた。国の首領 (sardār-i mamlakat) を集め、次のように相談 [p. 102 / fol. 51b] した。すなわち、「イラから来たクプチャク・クルグズたちがホタンに来て、数々の略奪をおこない、カシュガルに来るらしい。ヤルカンドでも安全ではないらしい。カシュガルからも兵があつまるように [せよ]。我々はいか様にも備えておこう」と言い、兵に役目を定めた (laškargā jā berdilār)。二日のうちに兵が集合した。

その後、ユースフ・ホージャムはムハンマディー・ミラーフルとともにユースフに手紙を書いて与えた。すなわち、「おお、ガーズイーという牧民<sup>147)</sup> よ、次のことを知れ。そなたは自分の以前の状態を忘れたのだらう。兄<sup>148)</sup> の我が帝王 [ホージャ・ジャハーン] の一本の毛髪に、そなたが害をおよぼすならば、私がそなたのすべての子孫親類を探し出してカバグ・アトク門

141) 前述の本書 [p. 99 / fol. 50a] では、ムハンマド・ミラーフルと表記されている。

142) šundīn. 「ヤルカンドから」ということであろう。

143) Or. 9660, fol. 56a は「オルダ」と記す。

144) har. D126 は PR と綴るが、Or. 5338, fol. 54b; Or. 9660, fol. 56a; Or. 9662, fol. 68a の HR による。

145) 「怒髪天を衝く」のごとく、激しい怒りを表現した文章だろう。

146) 現カシュガル (喀什) 市の南方約 9km に位置する疏勒市に当たる (前述の本書 [p. 83 / fol. 42a] の注参照)。

147) fatačī (<FTAJY)。A グループ写本の D191, fol. 96a; ms. 3357, fol. 119b では padačī (<PADHJY), Turk d. 20, fol. 84a では padačī (<PADAJY) と記す。pata または pada はペルシア語の pāda に由来する単語で “herd, drove, flock” の語義があり (Gunnar Jarring, *An Eastern Turki-English Dialect Dictionary*, Lund, 1964, p. 224), 現代ウイグル語で padiči は「牧民, 遊牧民」の意味である (飯沼英二『ウイグル語辞典』東京: 穂高書店, 1992 年, 247 頁)。fatačī を patačī の訛りとみなす。

148) aka (<AKA)。D126; Or. 5338, fol. 54b; Or. 9662, fol. 68b は AKAH と綴るが、Or. 9660, fol. 56b および A グループ写本の Turk d. 20, fol. 84a; D191, fol. 96a; ms. 3357, fol. 119b の AKA による。



(Qabāg-ātqū darvāzast) <sup>149)</sup> の前で羊のように喉を切らないならば、そして私がヤルカンドの土を天にまき散らして皆殺しをしないならば、わが名はホージャ・ユースフにならないだろう」と懲罰の手紙 (siyāsat nāma) を書き、その手紙をムハンマディー・ミーラーフルにより送った。「そなたは拒絶しないように」と強調した。

さて、この者たちは二日でヤルカンドに来て、城市の門の前に来て、門が固められているのを見た。「門を開けよ」と叫んだ。ユースフ・ホージャム猊下の命令を届けた。門番たちは遅滞なく門を開けた。この者たちは城市に入り、ガーズイーの屋敷 (ハウリ) に行き、拒絶されることなく (bī-ibā) 家に入った。使者のカルマクをはじめ数人のベグたちが坐っている。手紙がガーズイー・ベグの手に **[p. 103 / fol. 52a]** 渡された。ガーズイー・ベグは恭しく受け取って読んだ。その身体に震えが生じた。これより前にスィッディーク・ホージャムがホタンへの途上ガーズイー・ベグの者により送った手紙も来ていた。この二つの手紙の懲罰によりガーズイー・ベグは分別がつかなくなり (‘aql lāl bolup), 正気を失った (hūš qalmadi)。完全にへりくだり、なんとか (hūb) ムハンマディー・ミーラーフルの前に <sup>150)</sup> 進んだ。

さらにまた引き続いて、フシュ・キフェク・ベグの手紙が来た。次のように書いてある。「おお、ガーズイー・ベグよ。そなたの邪悪さ (šūmluḡ) によりヤルカンド全域において、そなたの親類が全滅している。そなたは二日間の儚い世界のためにイスラームから顔をそむけ、カーフィルに援助 <sup>151)</sup> して、預言者の子孫を裏切っている。ユースフ・カドゥル・ハーン・ガーズイー陛下 (Ḥaḍrat-i Yūsuf Qadīr Ḥān Gāzī) <sup>152)</sup> やイマームたち <sup>153)</sup> の戦いの時から今次にいたるまで、我々ホタンの民から、この悪名は免れないでいた。ここではまた、そなたのような二人 <sup>154)</sup> の詐欺師、裏切り者の邪悪さにより、すべてのホタンの民に悪名が残った。今またさらに、そな

149) ハルトマン氏によると、この門 (Qabagh Artqu / Atqu-Tor) は民衆のあいだで Qawat-Derwāze と呼ばれていたという (Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choḡas in Kašgarien.” p. 216, note 6, p. 246)。堀直氏は、この門 (Qabaḡat) はヤルカンド城市の東北門であり、アクセスに至る道の出発であるとみなしている (堀直「回疆都市ヤルカンド——景観の復原の試み——」『甲南大学紀要 文学編』63, 社会科学特集, 1987 年, 41 頁)。

150) pīš. D126 は PŠ と綴るが, Or. 9660, fol. 57a の PYŠ による。

151) yāvarlik. D126 は YARVRLYK と綴るが, Or. 5338, fol. 55a; Or. 9660, fol. 57a; Or. 9662, fol. 69a の YAVRLYK による。

152) カラハーン朝の君主 (在位 1026/27-1032) で、ホタンの征服とイスラーム化に勤めた (Omeljan Pritsak, “Die Karachaniden,” *Der Islam*, 31, 1954, p. 28 および系図参照)。

153) ユースフ・カドゥル・ハーンなどカラハーン朝のハーンに協力してホタンの異教徒に対してジハードを行い殉教した 12 人のイマームの物語、およびホタン地区に存在する 12 人のイマームのマザールに関する伝承を踏まえたものであろう。なお、ユースフ・カドゥル・ハーンのマザールはカシュガルにあった。濱田正美『東トルキスタン・チャガタイ語聖者伝の研究』<ユーラシア古語文献叢書 4> 京都: 京都大学大学院文学研究科, 2006 年, 9 頁, 54 頁, 注 74, 156 頁, 注 32 参照。

154) 前述の本書 [p. 96 / fol. 48b] で言及されているニヤーズ・ベグを含む二人ということであろう。

たのなした行為の邪悪さにより復活の時にいたるまでホタンの民にこの悪名は決して免れない。私もそなたと同郷 (ham-diyār)<sup>155)</sup> であることに嫌気が差して<sup>156)</sup> いる。私はそのような地方 (diyār) を捨てた。全世界の恥辱が私に向かった。そなたが今、この事の対処をして、さらにホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下を統治の王座 (taht-i salṭanat) に坐らせ、そなたの罪〔の赦し〕を乞うならば、**[p. 104 / fol. 52b]** ホージャムは恐らく罪を赦す。平安あれ」。

それで、ガーズイー・ベグはこの言葉を聞いて驚き、おこなった事をとても後悔して、分別がつかなくなり、力が残っていなかった。この言葉をオルダの人びとが聞き、一つの大望が百〔倍〕になった。オルダをさらに強固に保ち、勇ましくなった。しかし、ガーズイーは自分の人びとをカルマク風に仕立てて (Qalmaqča yasap), ホージャムが坐していた小部屋の前に来て〔ホージャムを〕懲らしめさせ、ガーズイー・ベグ自身は〔その行為を〕禁ずる者となり、「ホージャムを苦しめる前に、そなたたちは私を苦しめよ」と言う者となり、毎日、策略をめぐらせていた。

この状態のときにホタンから人が来て、「スィッディーク・ホージャム猊下がガーズイー・ベグのすべての家族親戚や騎兵随員 (ḥayl ḥaṣam) を捕虜にして、七千<sup>157)</sup> のホタンの兵を率い、ウマル・ベグをはじめクルグズの兵とともに捕虜たちを枷、鎖につないで連れてきて、ヤルカンドの門の前で皆殺しをしているらしい」と言った。ガーズイー・ベグはこの言葉を聞き、気が動転した。〔ガーズイー・ベグは〕すべてのカルマクたちをバーク (庭園) に下馬させていた。このカーフィルたちにも仕事は残っていなかった。まさにこの夜、息子〔スィッディーク・ホージャム〕から一本の剣が〔ホージャ・ジャハーン・〕ホージャムにもたらされた。次のように上申された。「突然クルグズたち<sup>158)</sup> が襲撃をかけて『我々は殉教させている』と言うならば、〔ガーズイー・ベグたちは〕門の脇にいて、入る者を殺すであろう。我々もほっておかない」と。ガーズイー・ベグはすべての友人仲間、知人のみならずヤルカンドの人びとを集め、出来事を説明した。そして、この者たちに忠告を **[p. 105 / fol. 53a]** 訊ねた。この者たちは皆、一致して次のように言った。「〔これらの国は〕<sup>159)</sup> 特にホージャ・イスハーク・ワリー (Ḥvāja Ishāq Walī)<sup>160)</sup> の御座所 (manzil maqām<sup>161)</sup>) である。これらの国 (bu mamlakatlar) はこの方の子

155) Or. 9660, fol. 57b では bir yurtluq。

156) bīzār. D126 は BYZA と綴るが、Or. 5338, fol. 55b; Or. 9660, fol. 57b; Or. 9662, fol. 69 の BYZAR による。

157) D126; Or. 5338, fol. 55b は「七十万」とするが、Or. 9660, fol. 58a; Or. 9662, fol. 70a による。

158) Or. 9660, fol. 58a; Or. 9662, fol. 70a は「カーフィルたち」とする。

159) bu yurtlar. Or. 9660, fol. 58a; Or. 9662, fol. 70a による補遺。A グループ写本の Turk d. 20, fol. 85b; Cf. D191, fol. 97b; ms. 3357, fol. 123a は「ヤルカンド」とする。

160) カシュガル・ホージャ家イスハーク派の名祖 (1599 年没) である。

161) Or. 9660, fol. 58b では manzil vā maqām。

孫の祈願により繁栄している。この悪い策略事はそなたから生じた。そのことの邪悪さにより我々にも、どのような状況が現れるのか。そして、どのような出来事が起こるのか。今や、この事の対処は次のとおり。すなわち、ホージャムはとても温和な人である。恵み深さにすがり、気高い神の言葉〔クルアーン〕を仲裁にして、そなたの罪〔の赦し〕を乞うならば、恐らく罪を赦すであろう。そなたの幸運に害を及ぼさない」と忠告を示した。ガーズイーはその言葉に喜び、まさにその事を始めることにした。

物語の章。ユースフ・ホージャム・パーディシャー猊下について聞かなければならない。

まさにその日、ユースフ・ホージャム・パーディシャーはヤルカンドに手紙を送り、ホージャ・アブド・アッラー・ホージャム<sup>162)</sup>を千人の者とともにバルチュク (Bārčūq)<sup>163)</sup>に派遣した。すなわち、イラからサルク・カルファク・クルグズたち (Sariq Qalfaq<sup>164)</sup> Qirgizlar) が来ているらしい<sup>165)</sup>。彼らのもとに行くという口実でホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下を突然カーフィルたちが連れて行かないようにと。その後、すべてのウラマーやアミールたち<sup>166)</sup>、老いも若きも (h̄vurda kalān) カシュガルの人びとを集め、次のように言った。「おお、カシュガルの親友 (sirr-dār) たちよ、次のことを知り賢明になれ。いつまで我々はカーフィルに服属して生涯を過ごすのか。どんな顔で至高なる神の宮殿に向かうのか。小生に聖戦 (jihād ǧazāt) を義務としている。【p. 106 / fol. 53b】神に称賛あれ。ムスリムたちには、カーフィルと対抗するほどの力がある。何故ならば、カーフィルたちの中で分裂状態がひどいからである。二つの別々のクルグズたちもカルマクたちから顔をそむけ、ムスリムたちに加わった。一つの集団 (gurūh) のクルグズはホタンにおいて確乎となった。〔もう〕一つの集団のクルグズはカシュガルにおいて確乎となった。最初からイスラームの勝利の意図が私の心の隅から離れなかった。私はい

162) ユースフ・ホージャムの息子 (本書 【p. 69 / fol. 35a】「日本語訳注 (3)」48 頁参照)。

163) 現在の巴楚 (Maralbeshi) で、カシュガル市の東方約 220km に位置し、カシュガルとアクスの間 に当たる (ジャリロフ・アマンベク、河原弥生、澤田稔、新免康、堀直『『ターリーヒ・ラシーディー』 テュルク語訳附編の研究』118 頁、注 231)。

164) D126 は SRY(?)Q QALFAQ, Or. 5338, fol. 56b は SRYĠ QAALFAQ, Or. 9660, fol. 58b は SRYQ QALĠAN, Or. 9662, fol. 70b は SARYĠ QALFAQ と綴る。黄色いカルパク帽子 (sarīġ / sarīq qalfaq <qalpaq) という意味であるが、クルグズ族の集団名称である。アブラムゾン氏によると, sary kalpak (『タズキラ・イ・ホージャガーン』の sarygh kalfak) の名称で, bugu, sary bagysh, solto, chekir-sayak という諸部族より成る小さな諸集団が知られているという (S. M. Abramzon, *Kirgizy i ikh etnogeneticheskie i istoriko-kul'turnye svyazi*, Leningrad: Nauka, 1971, p. 61)。

165) A グループ写本の Turk d. 20, fol. 86a; D191, fol. 98a; ms. 3357, fol. 123b によると、ユースフ・ホージャムはイラにおいて、カシュガルに来ることをこのクルグズと約束していたという。

166) umarā. D126 は 'MRA と綴るが、Or. 5338, fol. 56b; Or. 9660, fol. 58b の AMRA による。

つも願って<sup>167)</sup>いた。このカーフィルたちへの服属から自由になり、ティムール・ハーン (Timūr / Tīmūr Hān)<sup>168)</sup>を統治の王座 (taḥt-i salṭanat) に坐らせ、国の仕事 (mamlakat kār-bārī) をその方に任せ、我々自身は隅にさがり、父祖の習わしのごとく祈願者の仕事をする時が来たらよいのになあ、と。神に称賛あれ。その時が今来ているようだ<sup>169)</sup>。目的が完全に達せられることを望む。今、相談〔の決断〕はそなたたちのもとにある。そなたたちはこの意図が理にかなうとみなすならば、約定をあらたにして、別々に忠誠の誓いの手を差し出せ」と、巧みな<sup>170)</sup>言い回しで、その言葉を述べた。

皆からの叫び騒ぐ大声<sup>171)</sup>の音が世に満ちた<sup>172)</sup>。一時のち、皆は我に返り、次のように返答に口を開いて言った。「今、我々の心は一つである。我々に百千の生命があれば、それはすべてイスラームの犠牲となろう。今、我々は死んでも、悲しみはない」と言って、皆は心底から忠誠を誓い、約定を新たにして、お祝いを述べた。カシュガルのアールム (a'lam, 最上位の学者)<sup>173)</sup>、アーフン・ムッラー・マフムード (Āḥvun Mullā Maḥmūd) はこの一団の **[p. 107 / fol. 54a]** 成功のために祈願した。

この時、三百人のカルマクがシラス (Širās)<sup>174)</sup>という集団 (firqa) から商売 (saudā) に来て、スカ・タグ (Sūkā Tāg)<sup>175)</sup>の側面にある・・・<sup>176)</sup>において天幕群を設けて (ḥayma vā bār-gāh tikip) 下馬していた。そして、都市のなかにもカラ・ハーンのカルマクとともに多くのカルマ

167) ārzū. D126; Or. 5338, fol. 56b; Or. 9660, fol. 59a; Or. 9662, fol. 70a は ARḌV / ĀRḌV と綴る。

168) D126 は TYMVR, Or. 5338, fol. 57a; Or. 9660, fol. 59a; Or. 9662, fol. 71a は TMVR と綴る。ティムール・ハーンは、ヤルカンド・ハーン家成員であるアブド・アッラシード・ハーンの息子エルケ・ハーンの息子である (本書 **[p. 47 / fol. 24a]**「日本語訳注 (2)」111 頁の注 137 参照)。

169) D126; Or. 5338, fol. 57a: Ol waqt maujūd bolgānga oḥṣay dur. Or. 9660, fol. 59a: Ol waqt emdi maujūd bolgānga oḥṣay dur. Or. 9662, fol. 71a: Ol waqt ḥālā maujūd bolgānga oḥṣay dur.

170) širīn. D126 は ŠRYN と綴るが, Or. 5338, fol. 57a; Or. 9660, fol. 59a; Or. 9662, fol. 71a の ŠYRYN による。

171) ġarīv ‘alālā faryād fiḡān. ただし, ġarīv を D126; Or. 5338, fol. 57a; Or. 9660, fol. 59a; Or. 9662, fol. 71a は ĠRV と綴る。

172) pur tutti. D126; Or. 5338, fol. 57a は pur を FVR と綴るが, Or. 9662, fol. 71a の PR による。

173) アールムの職責については、本書 **[p. 73 / fol. 37a]**「日本語訳注 (3)」51 頁の注 109 参照。

174) D126; Or. 9660, fol. 59b; Or. 9662, fol. 71 は ŠRAS と綴る。A グループ写本の ms. 3357, fol. 126b は ŠYRAS と綴る。「シラス」はジュンガル部長 (ハン, ホンタイジ) の直轄集団たる「二十四オトグ」のひとつ「シャラス」(小沼孝博『清と中央アジア草原——遊牧民の世界から帝国の辺境へ——』東京: 東京大学出版会, 2014 年, 32-33 頁) に当たろう。

175) D126 は SVKA, Or. 5338, fol. 57a; Or. 9660, fol. 59b は SVKH と綴る。ハルトマン氏によると, SVKA TAG は「Sūgāt (Sauget)-Tāg (楊の山)」と関係しているだろうという (Martin Hartmann, “Ein Heiligenstaat im Islam: Das Ende der Caghataiden und die Herrschaft der Choḡas in Kašgarien.” p. 248, footnote 1)。

176) ŠBR と綴られているが、読みと意味を解し得ない。

クがいた。〔ユースフ・ホージャムは〕イスラーム軍に許可を与え、「そなたたちは行ってカルマクたちに信仰を申し述べよ。彼らが〔信仰を〕受け入れるならば良い。さもなければ、殺すように」と命じた。城市に布告者<sup>177)</sup>たちが通りから通りに、「時代はめぐる。イスラームの時代」と布告し、太鼓〔の音を〕天に達せしめた。敵たちの心に裂け目が生じた<sup>178)</sup>。人々は互いに会えば、まずイスラーム風に握手していた (Islāmnī muṣāfaḥ qīlīšur erdilār)。奴隷にされたり解放されたりした夫妻 (banda vā āzād er ḥatun) は幸福になり喜んだ。

要するに、イスラーム軍はカルマクが下馬した大天幕 (otağ) 〔のところ〕に行った。カーフィルたちは知らせを得て、戦闘に従事した。突然、ムスリムたちが襲撃した。一時でカーフィルたちを蹴散らし、打ち懲らしめた。そのいくらかはウストウン・アルトゥシュ〔上アルトゥシュ〕(Üstün Artuş)<sup>179)</sup>を経て難を避けた。背後から追わなかった。一部の者は死んだ。しかし、〔城市の〕<sup>180)</sup> なかでカラ・ハーンの地位にあったカルマクたちは、害にならないカーフィルであった<sup>181)</sup>。いつもムスリムたちに利益をもたらすことを望んでいた。そしてまた、〔カルマクの〕使者が来たとき、使者の様子がおかしいことを〔ムスリムに〕知らせていた。それ故、**[p. 108 / fol. 54b]**「そなたは見たことを〔カルマクに〕語るように」と言って、このカーフィルを安全に彼自身の国 (öz diyārī) に出してやった。

それで皆の心は平静を得て、悲しみが除かれた。クルグズたちに対しても、「我々を欺いて、捉えてカルマクに渡すかもしれない」と疑っていた。その事からも自由になった。その後、ヤルカンドに、ホージャ・ジャハーン・ホージャム猊下の解放のために軍を率いることを考え始めた。

〔以下、日本語訳注 (5) に続く〕

177) munādī-gar. D126 は MNADKR と綴るが, Or. 5338, fol. 57b; Or. 9660, fol. 59b; Or. 9662, fol. 71b の MNADYKR による。

178) darz ketti. D126 は darz を DRD と綴るが, Or. 5338, fol. 57b; Or. 9660, fol. 59b; Or. 9662, fol. 71b の DRZ による。

179) ウストウン・アルトゥシュ (上アルトゥシュ) はカシュガル市の西北約 20km に位置する。アルトゥシュはアルトゥチュとも表記される。前述の本書 **[p. 79 / fol. 40a]** の注参照。

180) Or. 5338, fol. 57b; Or. 9660, fol. 60a; Or. 9662, fol. 71b の šahr により補う。

181) Or. 9662, fol. 71b-72a は「城市のなかでカラ・ハーンの地位にあったカーフィルたちに害を及ぼさなかった」と記す。